



Title	モダリティから見た主体：感情表現を中心に
Author(s)	劉, 笑明
Citation	国語国文研究, 106, 48(19)-40(27)
Issue Date	1997-07-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94769
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_106_48-40.pdf



モダリティから見た主体

——感情表現を中心に——

劉 笑 明

キーワード：主体、述語用言、モダリティ

要 旨

本論文は、現代日本語の感情表現を中心に発話・伝達のモダリティから主体と述語用言との関わりを、構文的に明らかにしようという試みである。この中で感情の主観性、客観性および構文の主体と話者との一致性、相異性という問題が論じられる。

1. はじめに

現代日本語には「嬉しい」、「楽しむ」、「眠い」、「痛む」というような、感情、感覚を表す述語用言がある。本稿は西尾（1972）、寺村（1982）二氏の分類に基づいて、感情・感覚を表す述語文を感情表現^(註1)と呼び、感情の「感じ手」に対して感情の主体（以下、主体と略す）と呼ぶことにする。表出といった発話・伝達のモダリティ^(註2)から見れば、感情表現では一般に話者主体を主として話者自身の感情を表すのが原則だが、述語用言の形態、状態性、総称性主体および文末に現れた説明、判断のモダリティによって、他者の気持、状況を表すことができる。しかも感情の主観性と客観性も違ってくる。これまで、感情形容詞の研究が多く見られるが、総称性主体および感情動詞についてはあまり詳細に論じられてこなかった。

そこで本稿は、感情表現の主観性と客観性によって、発話・伝達のモダリティから主体と述語用言との関わりをめぐって、主体としては一体、どのようなものが表現されるか、どのように制限されるかを、感情表現を通して分析していきたい。

2. 感情の主観性

- (1) わたしはしばらく沢先生に会ってはいないのだ。名前をいわれただけで、胸が痛くなるほどなつかしい。（三浦綾子『石の森』）
- (2) あたしは、毎朝、お客さんの書き散らした原稿用紙、番号順にそろへるのがとっても、たのしい。たくさんお書きになって居れば、うれしい。（太宰治『富岳百景』）
- (3) 私は新しい洋服がほしい。（芥川昭寿『外国人のための助詞演習』）

- (4) 昨日は遅くまで起きていたので、すごく眠い。(西原玲子他『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 5 形容詞』)

のような、感情形容詞は文末に現れ、平叙文、現在形で、話者の感情が直接的表出である。つまり話者の発話時における感情表出といったモダリティを有するために、話者が主体(省略する場合がある)となり、主体と話者とが一致しなければならない。感情形容詞は多くの場合、主体と対象語と互いに関与するが、主体だけに関与する場合もある。荒(1989)では感情を表す形容詞が「状態形容詞」と呼ばれているが、主観性の強い感情形容詞(語尾がイまたはシイ類)を状態形容詞とは言いにくいと思う。状態性用言の場合、構文の主体は自由で、主体と話者との一致という感情表出のモダリティに制限されないわけである。この点については久保(1994「日本語の動作・状態述語について」、劉(1996「「たい」から見た主語とモダリティ」)を参照していただきたい。

- (5) 習い始めて僅か三週間だというのに、その上達の速さに驚く。(森田良行『基礎日本語辞典』)
- (6) 私には助けてあげられず、心が痛む。(小笠原信之『日常生活の分野別日本語表現便利帳』)
- (7) わたしは何となく、苦しい表情をしていたような気がする。(三浦綾子『石の森』)
- (8) 薄暗い後ろの席には二組ほどのカップルが見える。(泡坂妻夫『斜光』)

のような、述語用言は感情を表す動詞であり、主体が文に出現しても、しなくても、有情物の話者である。(6)の「心が痛む」とはここで「苦しみを感じる」という意味で、慣用的な言い方である。(5)–(8)の例は主体と話者とが同一で、話者の発話時における心的態度を直接に表す。通常、動詞の現在形は一般に現在の状態を表さずに、恒常の習慣または未来のことを表すが、感情動詞の場合は現在の状態も表すのである。

- (9) わたしは、今にも倒れそうな彼女の青い顔を見て、胸が痛んだ。(三浦綾子『石の森』)
- (10) わたしは目をそらした。いいがたい不快さに、腹が立った。(三浦綾子『石の森』)
- (11) 僕は彼女に泣かれて弱った。(小泉保他『日本語基本動詞用法辞典』)
- (12) その発見で、レンズのこちら側に居る男の存在が確認されたような気がした。(泡坂妻夫『斜光』)
- (13) 空が、都会の汚れた空を見慣れた目には、異様なほど澄んで見えた。(赤川次郎『悪魔のような女』)
- (14) 舟を漕いで腕が疲れた。(森田良行『基礎日本語辞典』)
- (15) 布を織り続ける機の音は、私には美しい音楽に聞こえた。(林史典『現代国語用例辞典』)

のように、感情動詞に「タ」がつくものであり、話者と主体とが一致するし、話者の発話時の感情を直接に表すこともできる。テンス・アスペクトから見れば、一般に動詞タ形は動作の過去、完了を表すが、感情動詞タ形はその動作が行われていたが、過

去、完了を表さず、つまりこの「タ」は「非過去」で、現在の状態を表すのである。

- (16) 町の様子があまり変わってしまって驚いている。(小泉保他『日本語基本動詞用法辞典』)
- (17) 私たち家族は金に困っている。(出典同上)
- (18) 話し相手がいないので一人で絵を描いて、楽しんでいる。(文化庁『外国人のための基本語用例辞典』)
- (19) 私は本当に心から喜んでおります。(NHK テレビ番組「百歳バンザイ」1996、7、20)

のように、主体と話者とが同一であり、述語の感情動詞に状態性用言「テイル」がついて一種の感情(動作)の継続を表すより、むしろ感情の最中の状態を表し、しかも話者の発話時の感情を直接に表すのである。(18)、(19)の「楽しむ、喜ぶ」というような感情動詞は何らかの誘因によって感情が生起するという外的な表現であるため、そのまま話者の感情を表しにくい。しかし、テイル形が主に一種の外的な表現であるため、このようなケースにも使用することができる。

上の用例はすべて主観性の強い感情表出といった発話・伝達のモダリティである。

3. 感情の客観性

客観的な感情表現の中に二種の現象が見られる。その一つは話者主体であり、もう一つは他者主体である。以下、それぞれの表現を分析してみたい。

A 話者主体

- (20) 私は彼らに見られているのがうれしかった。(大岡昇平『野火』)

(21) 飛び乗って腰掛けると尻の肉がジイント痛かった。(里見淳『多情仏心・前』)
のように、主体と話者とが一致するが、テンスから見れば、形容詞に「タ」がついて過去のことを表すので、話者の発話時の心的態度を直接に表すことなく、主体の感情は外に現れた過去の事として表現される。文は客観的な叙述である。

- (22) 一生懸命日本語の勉強をしないと、授業で困ります。(芥川昭寿『外国人のための助詞演習』)
- (23) 彼の冷たい人間性を憎む。(小泉保他『日本語基本動詞用法辞典』)
- (24) 夜の舗道を歩くと、コツコツとひどく淋しい音がする。(三浦綾子『石の森』)
- (25) 隣の家から毎日ピアノの音が聞こえる。(広瀬正宜他『日本語学習使い分け辞典』)
- (26) 雨が降ると、昔骨折した足が痛む。(出典同上)
- (27) 細かい字ばかり読んでると、目が疲れる。(出典同上)
- (28) 何だかリングのにおいがする。(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)
- (29) 振り返ると、境内の一隅にテントが張られ、湯気が立ちのぼっているのが見える。(泡坂妻夫『斜光』)
- (30) 彼の絵には努力の跡が見える。(小泉保他『日本語基本動詞用法辞典』)

(31) 手紙が戻ってきたところを見ると、彼はどこかに引っ越したと見える。(森田良行『基礎日本語辞典』)

(32) 何よりも生活の安定を望む。(出典同上)

のように、感情動詞の現在形で現れ、主体が文に出現しなくても話者主体である。しかし上記の例は話者の発話時における心的態度の表出とは言えない。文脈によって、(22)は一種の恒常の仮定を表し、(23)―(29)は一種の恒常の習慣、現象を表す。特に(28)、(29)ではそれぞれの現象は発話当時に関係せず、発話時の前から発話完了以後のある時間帯の中に続いて自然に存在しているので、話者は発話時の心境を含むうえで、主に客観的な現象を述べるのである。(30)、(31)では話者は外的な様子、現象によって事物に対する一種の判断を表し、(32)は未来のことを表す。

普通、「喜ぶ、楽しむ」のような感情動詞は、主体が話者自身であるときには使うことができないという説明を、よく耳に入る。しかし、このような規定は不十分だと思う。寺村(1982)もこの点を指摘しているが、具体的な調査は行われなかった。問題としては述語用言の状態性によって決まる。

(33) いいニュースを聞かされても、今の私は喜べない。(小泉保他『日本語基本動詞用法辞典』)

(34) テレビがあれば、うちで楽しめます。(文化庁『外国人のための基本語用例辞典』)

のように、やはり話者主体であり、述語用言は可能の意味を表す状態動詞であるために、文は成り立つ。しかし、この時は心的態度の直接的表出ではなく、話者は何らかの理由、条件で自分の気持を客観的に説明するのである。

(35) わたしは自分が、氷のように冷たく冷えていくのを感じた。(三浦綾子『石の森』)

(36) 私は最近の音楽をどこか物足りないと感じている。(小泉保他『日本語基本動詞用法辞典』)

のように、(35)の述語動詞に「タ」がついて、話者は発話当時に過去の事に対して一種の回想を表す。(36)は述語動詞に「テイル」がつくものである。話者の発話時の感覚または感覚の最中を表さず、実際、その印象は以前ある時から現在まで存在(結果の残存)しており、話者は事物の現象、状態に対して客観的に叙述する。

B 他者主体

感情形容詞が文末に現れ、平叙文、現在形の場合、他者主体の表現は一般に成り立たないが、次のようなことが許されるようである。

(37) 一体安吉は、女の体の線に好き好きがあった。彼は高い胸が好きだ。(中野重治『むらぎも』)

(38) 砂原宗四郎はモノにこだわるのが嫌いだ。(中央公論 1953、9)

のように、主体が制限されない。西尾(1972)は「好きだ、嫌いだ」について、かれはかの女が好きだ。

あの人はたばこがきらいです。

などとあたりまえに言える。……一言で言えば、「すきな」「きらいな」は感情形容詞の性格をもってはいるが、一般の感情形容詞とは違う独特の性質をもっているために、例外的な事例をなしているのであろう。(『形容詞の意味・用法の記述的研究』P 30)

と述べている。しかし、これは意味的な解釈であり、構文上には強い根拠にならないだろう。実際、(37)、(38)の文は名詞述語文と同様な性質を持ち、述語用言は感情を表す状態性(語尾がダ類の形容詞)用言^(註3)であるため、主体が話者との一致という制限から解放され、主体は話者でも他者でも良いのである。しかし、他者主体が来るとき、心的態度を直接に表さず、話者は外に現れた他者のことに対して客観的に叙述する。

(39) 駒子は、そういう叔父の態度がうれしかった。(獅子文六『自由学校』)
のように、感情形容詞に「タ」がつくものも可能であり、他者の感情は外的に一種の客観的な状態として表現される。実は話者の視点が観察者の側から他者の側に移り、その立場から表現したものと考えられる場合がある。この「タ」は過去のことを表し、このような表現が文学作品によく現れる。

寺村(1984)、堀川(1991)の研究には感情動詞も人称制限があり、感情動詞現在形でその主体は一人称の話者に限られる^(註4)というような説明が見られる。一体、他者主体の表現ができるかどうか、次の例を見てみよう。

- (40) 彼は、自分の思い通りにならないとすぐに怒る。(広瀬正宜他『日本語学習使い分け辞典』)
- (41) このホテルは、どの部屋からも富士山が見える。(出典同上)
- (42) 母は余暇を編物をして楽しむ。(小泉保他『日本語基本動詞用法辞典』)
- (43) あの子は人から注意されるのを喜ばない。(出典同上)
- (44) この観葉植物は寒さを嫌う。(出典同上)
- (45) 風は大地の匂いがする。(泡坂妻夫『斜光』)

のように、感情動詞はやはり文末に現れ、平叙文、現在形であるが、主体と話者とは異なり、主体は他者である。しかし、(40)―(43)では他者の気持は直接表出とは言えず、他者主体の行為、性格、現象が外に現れて話者に知られていること(恒常の習慣、現象)を前提として話者は他者のことを客観的に述べるである。(41)の「ホテル」は擬人化であり、人間がいるところであると考えられる。(44)、(45)では主体は非情物であるが、擬人化として考えられ、しかも人々によく知られている一種の客観的、自然現象である。話者はこのような現象に対して客観的に叙述する。

上記の例では述語動詞は現在の状態、未来のことを表さず、一種の恒常の習慣、現象を表す。これは話者主体と違うが、このような文脈、条件で文も成り立つ。

- (46) 洋子は言い知れぬ恐怖を感じた。(赤川次郎『悪魔のような女』)
- (47) 実際、あれだけ朝食を食べ、新聞を見て、総てを揃えて送り出されると、こんなにも気分が違うものか、と中田は驚いた。(出典同上)
- (48) 西目は大体の事情が判ってきたような気がした。(泡坂妻夫『斜光』)

のように、主体と話者とは一致しない。他者主体の場合、感情動詞に「タ」がついて、発話時の状態を表さず、感情動作の過去、完了を表す。話者は事件の発生当時、外に

現れた他者の様子、気持に対して客観的に述べるのである。

(49) 彼女は婚約者に不安を感じている。(小泉保他『日本語基本動詞用法辞典』)

(50) 受験に失敗して、彼はとても悲しんでいる。(出典同上)

(51) 母は真由美が約束を破ったことに怒っている。(出典同上)

(52) 彼女は病人の世話で疲れている。(広瀬正宜他『日本語学習使い分け辞典』)

のように、主体と話者とが異なる。感情動詞に「テイル」がついて、他者の気持を直接に表さず、他者の感情が外に現れて話者に知られており、話者は他者の気持を客観的に述べるのである。アスペクトから見れば、他者の感情は一種の状態として、ある特定の時間の中に残存することを示す。

これまでの研究では、総称性主体の構文についてはあまり触れなかった。そこで、次は総称性主体がどのように表現されるか、ということを検討してみたい。

B-1 総称性主体

感情表現では総称性主体が通常、文に現れる。

(53) 留学生は家族と住める宿舎がほしい。(関道子『北海道大学における外国人留学生の住環境について』)

(54) 増税は、家計のやりくりにも苦労している主婦にとっては痛い。(林史典『現代国語用例辞典』)

(55) 外国で暮らす者はどうしても自分の国が懐かしい。(作例)

(56) 年寄は若者に親切にされるのが一番嬉しい。(作例)

(57) 残業は若い男性にとっても大変つらい。(作例)

といったような文では、話者自身の感情を表さず、主体と話者とが異なる。感情形容詞(語尾がイまたはシイ類)が文末に現れ、平叙文、現在形の場合、他者主体の構文は一般には不可能のはずであったが、上例の主体は単一、特定、ある具体的な個人を指さず、その同類の全体を表す総称的人称(generic)で、文は誰にでも認められる一種の客観的な現象、事実として出現する。しかも主体と話者は有情物に限られる。

(58) 国民は清潔な人物を首相に望む。(小泉保他『日本語基本動詞用法辞典』)

(59) 子供は玩具をもらうととても喜ぶ。(文化庁『外国人のための基本語用例辞典』)

(60) 人間は何でもわかり過ぎると、かえって困る。(作例)

のように、主体と話者とは一致せず、主体も総称的な人称である。述語動詞は客観的な恒常の現象を表し、文は一種の客観的な事実として他人に知られて、話者はその恒常の現象に対して客観的に叙述する。

? (61) 人間は風邪を引いて頭が痛い。

のように、感覚を表す総称性主体の表現は特定の場面がなければ、自然な日本語とは言えないようである。荒(1989)も「人間は足がいたむ」という言い方は成立しない、といっている。一般に人間にとってはものに対して感情の面で「悲しい」とか、「喜ぶ」とか、大体共通性があるが、感覚の面では共通性はないだろう。感情とは、外界現象に対して目、耳によって意志的に生起したことである。それに対して、感覚とは、多

くの場合、身体内部から自発的、または外界現象は五官によって無意識的に頭の中に入って生じたことであると考えられる。しかし、文脈によって感覚から感情の意味がとれる場合もある。この点については今後詳しく再考したい。

従来は感情表現の主体（主語）を経験者とする学説^(註5)が比較的多く、つまり主体が経験者と定義されているケースが多い。しかし、上記の用例から見れば、経験者という者は単にその感情存在の主体だけでなく、主体以外の話者も精神の面でそのような経験、考慮を持つだろう。従って、感情表現では主体は経験者であるという概念が立てられにくいと思う。また、主体には必ずしも話者を含まない。総称性主体の表現は客観的な恒常の現象事実を表すので、述語用言は一般に現在形で現れる。

B-2 判断モダリティ形式

感情表現の文末に判断モダリティ形式を付けて、すべての他者主体の気持を表すことができる。

- (62) ……浅井はそれが嬉しいのだ。(石川達三『人間の壁・上』)
- (63) 怠けているお前を見たら、親はどんなに悲しむだろう。(文化庁『外国人のための基本語用例辞典』)
- (64) 家計を支える主人に死なれては、収入の道が途絶して一家は困るに違いない。(森田良行『基礎日本語辞典』)
- (65) 地球上に生きている人々は、だれもが幸福を望んでいるはずだ。(林史典『現代国語用例辞典』)
- (66) 父は、私が父の病院をつぐ意志のないことを知って、失望したらしい。(広瀬正宜他『日本語学習使い分け辞典』)

のように、判断モダリティ形式が文末に使用されるときに、他者主体の気持、状況を表し主体と話者との一致という制限がなくなる。しかし、この場合は感情の直接的表出ではなく、話者は内的、外的な情報によって他者の気持を推測、判断、説明する。特に述語用言タ形、テイル形に判断モダリティ形式を付ける場合、事柄の真実性が強い。「のだ……らしい」などについては、寺村(1984)と益岡(1991)の研究に詳しい。

要するに、客観的な感情表現では、話者主体でも他者主体でも感情表出といったモダリティではなく、話者は何らかの原因、理由によって事柄に対して説明、判断するといったモダリティである。また、形容詞が現在と過去というテンスの形をそなえているが、動詞の場合はテンス、アスペクトの形をそなえている。実際、感情動詞は感情形容詞とかなり違い、特に動詞の場合はその感情が表情や身体の動きとなって、外面に現れることに重点があり、外界の動的な事象を客観的に描写するのである。

4. おわりに

本稿は、感情表現を通してモダリティと主体との関わりについて、次のようにまとめることができる。

主観性の強い感情表出のモダリティでは、構文の主体と話者とが一致し、感情形容

詞は現在形に限られる。しかし、感情動詞の場合、動詞の形態は制限されないが、述語は自動詞または状態性用言である。

説明、判断のモダリティでは、主体と話者との一致という制限が解除され、主体は話者でも他者でも良い。感情を表す述語用言形態の制限が弱くなり、文は客観的な叙述である。

注

- 1) 西尾(1972)では感情形容詞には感情、感覚の二つを含み、寺村(1982)では感情表現には感情形容詞と感情動詞が含まれる。しかし、文脈によって感覚から感情の意味がとれる場合もあり、また感覚を表す用言は比較的少ないため、本稿は西尾、寺村二氏の分類に基づいて、感情・感覚形容詞と感情・感覚動詞を感情表現の一つとして扱っている。
- 2) 発話・伝達のモダリティには働き掛け、表出、述べ立て、問い掛けという四つのタイプがある。これについては、仁田(1989)を参照されたい。
- 3) 単純状態をもっているのは状態を表す動詞、形容詞、および「—だ」の形であるということについては、金田一(1976『日本語動詞のアスペクト』P 46)を参照のこと。
- 4) 感情動詞については、寺村(1984)には主体を第三者にして述語を基本形で言い切るとおかしい文ができる……これらは主観的な感情の形容詞と同じく、基本形で発話時の話し手の気持を表すのである(『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』P 104)。堀川(1991)には感情動詞はル形で現在を表すことができる、それは一人称話者の感情に限られる(『心理動詞のアスペクト』『言語文化部紀要』P 188)。
- 5) 野村(1979「現代日本語感覚文の研究」)を、益岡(1987『命題の文法—日本語文法序説—』)を参照されたい。

参考文献

- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
金田一春彦(1976)『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
野村真木夫(1979)「現代日本語感覚文の研究」『国語国文研究』61 北海道大学国語国文学会
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説—』 くろしお出版
仁田義雄・益岡隆志(1989)『日本語のモダリティ』 くろしお出版
荒 正子(1989)「形容詞の意味的なタイプ」(言語学研究会『ことばの科学3』) むぎ書房
益岡隆志(1991)『モダリティの文法』 くろしお出版
堀川智也(1991)「心理動詞のアスペクト」『言語文化部紀要』21 北海道大学言語文化部

- 久保美織（1994）「日本語の動作・状態述語について」『国語学』178 国語学会
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語ノ時間ノ表現——』ひつじ書房
- 劉 笑明（1997）「「たい」から見た主語とモダリティ」『国語国文研究』105号 北海道大学国語国文学会

（りゅう しょうめい・北大大学院博士後期課程）